

〔特別寄稿〕

横浜市営地下鉄駅ボランティア運営委員会

鉄道マン冥利

3. 1 1 東日本大震災に伴う「駅ボラ」活動の中止。それは、横浜市交通局と市民が協働してきた10年間の継続活動が途絶える、苦渋の決断でした。

3月26日開始の「春の常駐型駅ボランティア」に向けて準備を始めた矢先の大地震。余震はその後も続き、計画停電のため、電車は臨時ダイヤで運行し、駅構内の照明は絞られ、エスカレーターも最低限の稼働。駅は混沌として、行き交う人々も重苦しい雰囲気を引きずっていました。

実施か中止か・・・先行きの見通しも立たないなかで行われた交通局とボランティア代表者の協議も、議論は行きつ戻りつし、最後はボランティアの安全確保を優先して「中止」と決めました。重い決定の後、ようやく緊張感から解放され、震災直後はどこにいた、どうしていた、そんな雑談モードに入った時のこと、

「電車の運行再開が知らされた時、お客さまから大きな拍手が湧いて、とても感激しました！」

その場の興奮を思い出すかのように話してくれたのは、ボランティア事務局を担当する交通局職員の方です。入庁1年目の、まだ新人のぎこちなさが微笑ましい、大半が高齢者のこの組織へ若さと元気をもたらしてくれる貴重な存在です。地震発生とともに横浜駅へ緊急応援に駆けつけ、苦況を乗り切った末の感動的な場面に、「この時ほど、交通局へ配属されたことを誇りに思ったことはありません」

震災から半年。当時の混乱を風化させることなく、将来への教訓として伝えなければと思い始めていた最近、ずっと気になっていた震災当時の横浜駅のでき事を聞く機会が到来して、私の心は躍りました。

14時46分 地震発生。

かなり大きな地震。過去に経験のないほど強烈な揺れ。列車は即座に停止。

横浜駅はJR・私鉄など、複数の路線が地上へ地下へ複雑に乗り入れしており、テレビニュースの画面から伝わる映像に大惨事を予感します。

直ちに、状況確認と乗客の安全確保へ。

列車はどこに停まっている？ ホーム？ 駅間？

駅の構内は？ 地上は？

15時20分 バスの運行停止、線路の点検開始、他社線の状況、---

様々な情報が錯綜するなかで、駅はお客様対応をこなさなければなりません。駅事

務室は緊迫し始めました。

コンコースや改札口周辺は、情報を求める乗客であふれかえっています。

電車は動く？ 動かない？ 動くとしたら、いつ？

ひっきりなしの問い合わせにも、ピリピリとした緊張状態が続きます。

しかし、どんな状況下でも、お客様への情報は確実なものを。

それが鉄道事業者の生命線である以上、

「申し訳ありません。現在点検中です。運行再開の目途は立っておりません。」

そう、ひたすら頭を下げることしかできません。

避難所はどこでしょうか？

何とか歩いて帰りたいので、ここから自宅までの道を教えて下さい。

そんな要望には、駅周辺の地図のコピーを渡して説明します。

18時45分 バスの運行が再開し、バス系統図のコピーも加わりました。

深夜になっても事態好転の兆しはなく、コンコース、階段、ホーム---

疲れ切った人々が至る所にすわり込んでいます。誰もが疲労の極限状態。

どうすることもできないもどかしさ。 いつまで続くんだろう・・・？

しかし、こんな時こそ鉄道マンは冷静な行動と的確な判断を。

23時15分 運行再開。

「運行を再開します」待望のアナウンスが流れた瞬間、その場にいた人々からどっと拍手が沸き起こりました。

ごくろうさまー ー ありがとうー ー

改札口からホームへと流れる人の波にもうれしさと安堵感が漂います。

26時30分。地震発生から12時間。横浜駅へ応援に出た新人の彼は、心地よい充実感に包まれながら疲労困憊した体を引きずりつつ、職場へ戻りました。待機していた上司に状況報告をすると、長く厳しい対応の末に、お客さまの信頼に応えられた感動の場面について思いを込めて伝えました。

上司は、深くうなずきながら一部始終を聞き終わると、

「鉄道マン冥利に尽きるなあ・・・。」

鉄道は、人を運ぶ手段であるとともに、人々の信頼を運んでいます。

多くの鉄道マンによってその使命が果たされた時、人々は惜しみない賞賛を送り、感謝の気持ちを表します。

緊急時こそその信頼。

こんな時こそ、お互いの信頼をより深めていかれるのではないのでしょうか。

【横浜市営地下鉄駅ボランティア運営委員会 副委員長 小池 久身子】